

同窓会25周年を振り返りて

会長 佐々木元彦

会員の皆様におかれましては、日頃同窓会の発展に御協力贈り有りがとう御座居ます。

卒業生の皆様には、各界でめざましい御活躍の御事、喜びにたえません。

我同窓会も昭和31年に、第一回生を、今年で早くも26回を数えるまでに至りました。

会員総数に於いては、全・定時制合わせて、1万1千余名となり、昨年10月10日には、同窓会創立25周年記念行事並びに、総会を開催しました処役員各位の多大なる御尽力のお陰で、盛大に催す事が出来、厚く御礼申し上げます。

思いおこせば54年9月にこの記念行事を企画し、開催日は55年10月10日に名古屋国際ホテルと決定し、準備が進められました。

盛大にして有意義な行事とする為に、役員一同組織作りに始まり綿密な計画が着々進められ、この為の労力と時間が惜しみなく費やされました。

特に名簿の作成には皆々様の御協力に感謝致しております。

記念式典においては、初代積木校長をはじめ、歴代の校長先生のお元気なお顔を拝し「日本広しといえども」母校ならではの光景と感無量でした。

創立当時からの思師の先生方をはじめとして、参加者600余名に至り、当日の会場は、割れんばかりの盛況でした。熱田を愛し、熱田の発展を願う心の現れと、会員諸氏の意気を感じました。

来年は熱田高校創立30周年の行事が、とり行なわれます。すでに第一回の準備委員会が催され、我々同窓会役員も出席し、其の主旨と行事計画をお聞きし、同窓会としても、我母校30周年記念に参加、御協力申し上げる事に相成りました。

ついては、会員各位におかれましては、別紙にて御案内させていただきますので、是非共、御協力御支援の程、御願ひ申し上げます。

最後になりましたが、同窓会25周年記念総会の準備と実施には、田中敬二、豊田和弘、竹内正己、岩淵正憲、江村雅夫、山田耕作、の各氏および各年度の幹事諸君の献身的な努力によるところ大なる故、深く感謝しております。

創立30周年を迎えるに当たって

学校長 櫻井 梅弘



本校は昭和28年に県のモデル校として創設されて以来着実な歩み続け、今や創立30周年を迎えようとしています。校歌に示すごとく、熱田の森清き地に、光あり、績あり、緑ありと師弟相携えて研鑽を積み、多

くの優れた人材を育ててまいりました。この度、その歴史を顧みて新しい糧とすべく、同窓会・PTAが文字通り一体となって30周年の記念行事の準備をすすめることになり、すでにそのスタートを切っています。資料をまとめたり縁ある人々とお目にかかったりして、伝統の輝きに接し得る日を心から待望しています。

このような記念行事の折には、「原点に帰れ」という言葉をよく耳にします。近頃、幸いにも、創設の頃の校長先生や先生方及び同窓生の記録を読んだりお話しを聞く機会に恵まれました。大変感銘を受けました。「我が前に道はなく我が後に道はできる」との気概に接するとき、敬意とともに羨望の念を持ちました。先達の心を我が心として前進を致したいとの決意を新たにします。

本校では、毎年の業績を記録保存するために、校誌「熱田」を発行しております。係の先生の努力によって、そこに長年にわたる正確な歴史を見ることが出来ます。熱く鍛えた時、照り輝やいた時、嵐に襲われた時、豊かな生活を享受した時など、社会の波に揺れはしましたが、品格、気力、健康の精神は一貫してゆるぎませんでした。伊勢湾台風による罹災をはじめ幾多の試練にも会いましたが、本校創立の精神を支えに見事に乗り切ってまいりました。それらのなつかしい写真を配した記念誌は、卒業生の方々には楽しく見ていただけるものと思います。

在校生諸君も運動に進学に頑張っております。サッカー、陸上、バレー等の運動クラブがそれぞれ立派な成果をおさめ、また吹奏楽部も毎年県大会で金賞受賞の栄に輝やいています。進学の面でも、年度による変動はありますが、大いに頑張っていることをお伝えして、ご挨拶に代えます。

伊勢湾台風と私



初代校長 積木 倫一

熱田は来年、創立30周年を迎えられる由、熱田につながる一同の大きなよろこびの年であると同時に、過去をふり返り、将来に想いを致す年でもあろう。伊勢

湾台風は、この思い出のうち、最もひどい災害をもたらしたものであり、私にとっても忘れえない台風であった。

台風が襲ったのは34年9月26日、当時私は、“胃がおかしいから”と入院治療を勧められていた。8月の下旬、夜半に胃の後側に鈍痛がつづき、診察を受けたが、誰からもそれ以上のことは聞けなかった。食べ物はまずく、体力は衰え、小じわが目立つといった不安つづきの時であった。ヘドロは校舎といわず校庭にあふれ、周りの樹木はなぎ倒され、避難者は教室に満ちていた。職員や生徒の皆さんの安否はなかなかつかめず、関係機関との連絡は電話も車も通ぜず、弱った体と足に頼るよりほかなかった。しかし駆けつけてきた生徒（第5・6・7回生の会員）の皆さんの盛んな気力は、まこと頼もしかった。

上司や医師の方々の強い導きもあり、10月5日午後、日赤第一病院に入ることにし、後事を托すことになったが、このことは誰にも知らせないよう願った。その朝、朝礼台の前に集った職員や半数近い生徒の皆さんの前で、熱田復興を重ねて呼びかけたのであったが、後側の只一本倒されずに残った、今は壮々と生い茂るあの楠の、フラフラした姿が印象的で、いかにもその時の私の気持ちにも似ていた。朝礼台に立つたのはこの時を最後に、私は翌35年3月、熱田を辞したのであった。

「胃潰瘍だ、ガンにならないため手術するのだ」という言葉を、そのまま素直に私は信じていた。“今日しもメス入れられるわが腹であるなでみる・手術つつがなく終り窓の空ぬける程に青し・傷の痛みにも口の渇きにも秋の夜は長し長しと思う・わが家の畳も百日ぶりの冬陽に坐り”といった3か月の病院生活であった。

それから十何年か過ぎたある日、家内から「実はガンだったのだ」と初めてうち明けられた時は、疑ってはいたものの、さすがにシュンとした。と同時に誰もがこの長い間、よくも黙っていて下さったのだと感動し、心から感謝した。その後二三の友人たちが、「今日までの年月は拾いものだよ」と評した程、当時は“ガンでダメだそうさ”という噂がもっぱらだった由である。それはとも角として、私を救って下さった広大な力に、宗教的

なまごころをあつくして、余命を大切にしているその後である。

伊勢湾台風にはもう一つのかかわりあいがある。それは、今は四角な石枠だけになった置時計のことであるが、裏面には贈積木君、広島高等師範学校学生部と彫ってある。私が昭和3年卒業して千葉県に奉職した時、送られてきた立派な時計で、炊事委員長として、懸案の改革を成しとげた労を賞されてのものであった。“私の人生の時・分を恥じなく刻んでくれるよう努めます”と礼状を書き、生活を共にして来たのであったが、熱田へ来た時には校長室の戸棚の中段に置いていた。そこへあの台風である。おし寄せたヘドロはようしやなく何もかも泥の中に沈めてしまった。ようやく退院、3月初め出勤して驚いたことに、時計は中段でそのまま真赤に錆びついてしまっていた。泣く泣く動かなくなった機械の部分を取り去り、残ったのがこの枠なのである。

昭和3年以来、私の時間を刻みつづけてくれた時計は、台風を堺にして動かなくなったが、危ぶまれていた私の生命の歯車は、すべてが初期に処置されて、止まらずにすんだ。あるいは私に代ってくれたのかも知れない。枠だけの時計から、ヘドロの苦しみが、昔のことどもが、トットツと聞こえてくる想いかられてならない。

伊勢湾台風は私の思い出の中に、改めて熱田とのつながりの深さを呼びさまし、熱田とともにと念じた創設から7年間の月日は消えそうもない。熱田はこの台風の大きな被害を払いのけ、年ごとに名声を高め、有数の高校として、いよいよ而立の年を迎えられる。目出度い限りである。母校熱田と表裏一体の進展をつづけ、昨年秋、25周年の祝賀会を盛大に催された同窓会の皆さんとともに、熱田の万々歳を、私も声高く唱えたいものである。

在任中の思い出



五代校長 鈴木 元一

御縁があって、49年4月に熱田高校に赴任し、以後4年間後厄介になった。それから3年、今春定年退職してやっと肩の荷が下りた。大過なく任を終えることができたのも、偏えに関係各位の御指導の御陰と心から感謝している。

在任中は、つねに先人の遺訓を継承することを旨とし

たので、格別申し上げることもないが、思い付くままを述べて責を果たすことにする。

自分の長い経験から、人生で最も大切なものは健康であり、その基礎を作るのは高校（旧制中学）時代だと信じてきた。クラブ活動に人一倍関心を持つのもそのためであるが、不思議に、私にはこの点でつきがあった。

例えば、津島商工の時はラグビー部が全国大会に出場したし、次の犬山高校では、野球部が予想を覆して夏の県大会の準決勝戦に勝ち進んだ。最近の千種高校でも、個人種目ではあるが、軟式庭球と水泳で全国高校総体に参加している。

しかしながら、その圧巻は本校サッカー部の全国高校総体3年連続出場の快挙である。本校では過去にも例がある由であるが、大変なことで、当時の関係者各位に改めて敬意を表するとともに、将来これを上まわる業績を挙げることを期待したい。

なお、その陰に隠れて目立たないが、定時制軟式野球部の全国大会参加も、幾多の悪条件を克服しての出場だけに、画期的な出来事であったと思う。

戦後開設された本校も、来年は創立30周年を迎えることになり、各種記念行事が計画されていると聞くが、願わくは、将来の隆昌につながる有意義なものとなることを祈りたい。私の在任中は、老朽個所の修繕に追われて本格的改修工事まで手が及ばなかったが、最近桜井校長以下関係者の御努力で校舎も面目を一新したので、これを契機に新たな飛躍を期してほしい。偶然だが、私は39年から4年間姉妹校の中村高校で勤務した経験がある。この両校が相携えて、愛知の高校の推進力になってくれたら、これに勝る喜びはない。

同窓会の会員各位には、日頃責任の重い職務を担当され、心の休まる暇もない毎日を送っておられると推察するが、健康第一で御活躍されるよう切に御祈りする。それと同時に、創立30周年を迎える母校の発展と後輩の指導のため、絶大な御支援を賜わるよう、隠退の身を顧みず、切望する次第である。

終りに、私事ながら老生に対する相変らぬ御厚誼を御願ひして、思い出の記を閉じることとする。



私が転勤してきた頃の熱田高校

鈴木 正子

熱田高校へ私がまいりましたのは昭和三十二年四月でした。今迄熱田の学区の人は瑞陵でしたが、一区一校制ということになり、熱田区に新しく県立高校ができ、丁度五年目のときでした。熱田の前には私は瑞陵におりましたが、居住地が近いこと、熱田には普通科の女の先生が一人も居られないこと、そして新卒の人はおさえがきかないし、年をとっていると長続きがしないからという理由で是非にといわれてきました。そのときは何だか通勤距離が近くなって嬉しいような気がしましたが、さてきてみますと、今迄の瑞陵の時のように恩師に甘えられるような雰囲気はぜんぜんなく、おまけに前にも申しましたように女の先生といえば、体育の先生がお一人、家庭科の先生が御二人、あと講師の音楽の先生がお一人おいでになっただけでした。いくら新前でも授業は週に二十一時間位もちましたが、何かお手伝いをしなければと気はつくのですが、どうきり出してよいのか毎日悶悶とした日が過ぎて行きました。結局距離が近く朝少しゆっくり出来ると思ったのは全くの勘違いで、当時新校の熱田は追いつけ、追いこせの時代で始業前の補習までありました。やはり少し位遠距離の職場でも馴れた所が一番いいなともう一度瑞陵にもどりたくて泣けてきたこともしばしばでした。でも生徒は非常に素直で真面目で授業を本当によく聞いてくれました。

クラスは丁度五学級になったばかりで、それまでは三学級だったそうですが、瑞陵のように商業、家庭などのある大世帯からみればとても小さい感じがしました。時々授業をしながら「みたことのある顔だな」などと思って出席簿をのぞいてみると瑞陵で教えた人の弟妹が坐っているのです。そんなときは本当になつかしくて一段と授業に身が入ったものでした。でもその後神経を使いすぎて長期に欠勤したわけではありませんが、半年ばかりわけのわからない病気をして、先生方からよくそんな健康状態で今迄やってこられたものだからかわれたこともありました。併しだんだん熱田にもなれ、瑞陵にもどりたいなどと考えることもなくなっていきました。

熱田高校に在職中一番忘れられないことはやはり伊勢湾台風です。毎日ヘドロの掃除。力仕事などしたことはない私は途方に暮れながらも生徒とあとかたづけに一所懸命でした。学科担任をしていた一年の女生徒が水にさらわれて亡くなりました。夏休みの宿題の作文をお願いして校誌にのせていただきましたが、その文面を今でも

よく覚えて居ります。

こうして熱田も生徒数がふえ、校舎も増築されて現在にいたりました。私のまいりました当時のように職人さんが土を掘りおこすと人骨がでてきたとやら、雨の日に宿直の先生が「ガタガタ」と無気味な戸を叩くような音を聞かれたなど全く嘘のようで、町の中の学校としては樹木もよく茂りすっかり落ちついた学校になりました。思い出はつきませんが熱田高校の今後ますますの御発展をお祈りして筆をとめさせていただきます。

温 故 知 新

名郷 栄助

私は論語の中の言葉である「温故知新」の句が好きで何か依頼の件があると好んでこの字句を書く様にしている。「温故知新」というのは皆様よく御存じの事と思いますが古き物事のよさを探ねそれに新しい知識を求めてそれに上乘せすることであると物の本に書いてあったのを読んだことがあるが私なりに書について考えてみるに私は近年特に写経に興味をもってこゝ十数年研讀してきましたが私の御師匠さんが五年前他界されましたのを期に写経から離れ万葉の道にモデルチェンジしました。世間ではよく身近の人が亡くなられて写経の道に入ると言われますが私は逆に御師匠さんの死によってその御師匠さんが研究されていた万葉のもつ幽幻の世界と現在の社会のもつリアル性との一致を求めてあえて挑戦してみたのです。而し御師匠さんの跡は餘りにも大きくとても追いつけそうにもなく時折これで行くのかと坐折感を味わっています。弟子は御師匠さんに追いつき追いこしてこそ一人前と言われますがとても一人前になれそうにもありません。そこで「温故知新」の字句が出てくるわけですが常に古い伝統と言われるものには必ずそこに積み重ねられたよさがある。漸新なものには覇気はあるが品格というものが無い。だからして古い良きものを充分熟達してその中に漸新な覇気を加えれば作家として最高の欣びであり最も望ましい方向であるが仲々その様な境地になれない現況です。又時には先生は「俺の技術を覚えるのはいゝが俺の模倣はいけな俺の技術は魏晉三漢の書が真隨である。漢字は中国から輸入されたもので仮名は中国にはない。日本人はもっと仮名を大切にしなければいけない。中国の漢字が日本人の感覚で仮名様にしたのが万葉仮名であると」。その言葉では解ったような感じではあるが仲々その感覚になれない自分にもどかしさを覚えつゝも御師匠さんは古きよき時代の異物であると自分

勝手に解釈して自画自讃している今日此頃です。ちなみに私の御師匠さんは日本芸術会員で文化功労者であった鈴木翠軒先生です。さて熱田高等学校も創立三十周年を迎えましたこの学校の出身者の中にも書を志す者がずいぶん分ふえましたが私の御師匠さんの思い出を記して今後の皆さんの指針にでもなればと。書くことは何とも思いませんが、文章を作ることは大の苦手、その苦手の文章を記したわけです。御理解の程。

O. B 諸君へのメッセージ

国語科 沢田 明

16回生が入学の年、熱田に赴任して、以来もう14年目を迎えてしまった。同時に着任の10人程の先生方も、あちらこちらへとご転出になり今では同じ国語科の小室先生と2人だけになってしまっている。少年のあどけなさをその顔に残して入学して来た諸君たちが、熱田での3年間の生活を過ごして、身も心もすこやかに成長し、青年のたくましさをただよわせながら、また卒業していく。年々歳々花は相い似たけれど、歳々年々人同じからずで、その間に出逢った生徒諸君たちは、いったい幾人になっているだろうか。くり返される事柄は、毎年同じようなことだけでも、その間に諸君たちも立派に成長し、私自身も年毎に頭髪を白くしていく。宜なるかな。14年前、清新気鋭の青年教師であった美術の今西画伯も、英語のミスターセツヤも、今ではともに2児の父親となってしまっている。

先頃、17回生のK君と20回生のH嬢の結婚式に相ついでお招きを受けた。それぞれに、おもむきのあるすばらしい結婚式であったが、とりわけ、それぞれのお相手との出逢いの話は感動的であった。こういう席にお招きを受けて、いつも思うことだが、そもそも世界に40億からいる人間の中から、たった1人に出逢って生涯の伴侶とする。そこには一編のドラマがあって当然だが、いつの場合も若い二人にふさわしい、明るくてドラマチックな出逢いがあり、それを大切に大切に育てた二人の愛の歴史を、ほのぼのと聞くのである。人生における人と人との出逢いということの何と神秘的で感動的なことか。縁ということの不思議さをつくづくと思うのである。

その縁があって、熱田に出逢った諸君たちの中にも、まだ独り身で居られる人は多いと思う。そんな諸君たちが、どうか、幸福な、感動的な出逢いを是非とも得られるよう祈ってやまない。私の頭がいよいよ白くなるにつけて、諸君たちも、生涯の伴侶に出逢うにふさわしい年

令となり、その心身と生活のますますの充実を得て、日々を過ごして居られるだろうと思うからである。

熱田で、元気に14年目を過ごしつつある私のこのごろの感慨を記して、以って、立派な社会人としてご活躍のO・B諸君へのメッセージとしたい。

花をおくろう

定時制教諭 合田 和男

……手を取り合って歩いてきた
ふしくれた荒れた手に
ふるさをつくる
仲間の手から
花をおくろう オレンジの

(「花をおくろう」)

歳月人を待たずというが、月日の経つのは早いもので私が本校に赴任して三年が過ぎた。この春、新任以来担任をしてきた生徒が巣立っていった。三年前、二十二名を教えた彼らも十七名に減り、入学時からみると半分になっていた。しかし、卒業していった一人一人の顔は一つの仕事をやりとげたものだけがもつさわやかなものだった。彼らの胸の内には

「たどりつき ふりかへりみれば やまかわを
こえてはこえて 来つるものかな」

という歌の心境に通じるものがあつたのかもしれない。「式」が終って、彼らと「花をおくろう」を合唱する中で、改めて「定時制の卒業式は素晴らしい」という、年毎に感じてきた思いを一層強くした。

私自身の卒業式は、当時高校紛争の嵐が吹きあれ、渦巻く学校への不信の中で、手をつなぐ仲間さえも見失い、手を取りあって「学ぶ」ことの喜びより他人との競争に打ち勝つことを強いられた、日々との訣別するためのものであり、特に感動はなかった。

それに対し、定時制に学ぶ生徒にとって、「卒業式」は、そこに至るのに大きな努力を要するだけに、大きな目標であり、そこに至ったとき受けとる感動は大きく、そして、彼らは、それと同時に、その労苦が報われるだけのものを受けとるのである。それは、競争原理の支配する所からは得ることのできない、思いやりや仲間と手をつなぐ喜び……といったものである。それらの一つ一つがそれぞれの胸に高校生活のモニュメントとして残ったものと思う。私自身、自分の高校生活に大きな悔いはないが、私が得れなかったこれらのものを彼ら得たこ

とをうらやましく思う。これらのことが定時制の卒業式を素晴らしいものにはしているのではないだろうか。

そのような卒業式を彼らと創りだすことができ、ふるさをつくる仲間の一人として、彼らに「花をおくろ」ことができたことをうれしく思うと同時に、数ある学校の中から、私の教師生活を、この熱田高校定時制で始めることができたことを誇りに思う。

美術部の活動

ふりかえてみると、今年度も、はや半分がすぎゆこうとしています。3年生の先輩のご卒業に引き続き、4月には各学年めでたく全員そろって進級いたしました。ひょうきんな1年生などといわれてきた私たちも今ではすっかり先輩という言葉に慣れてしまいました。今年は例年になく1年生が多いとかまじめであるとかで、先生は「また美術部の黄金時代が復活するかな」などと喜んでおられたのが4月。すぐに1年生は、円柱などのデッサンをする幾何をはじめました。2年も同じようにデッサンです。3年生の先輩は、お忙がしいのでほとんど出てこられないのですが、指導というのは考えていたよりはるかにむずかしいことで、ほとんど3年生の先輩なしでは出来ませんでした。それはとてもかく、4月にそろってデッサンをするのはなぜか、といいますと、あたりまえのことながら、何事の出発も基礎からだからです。けれどこれもやる気の問題。木炭紙を見るとゆううつになる人もいますし、情熱を傾けすぎて紙がつぶれてしまう場合もあるのであります。

さて、それが終ると1年は水彩になります。今年は静物をかきました。ランプが割れたり、かぼちゃが腐ったりと、常に新しいモチーフにこと欠かない我がクラブです。今年もたのしい絵がかけたようです。その間2年生は何をするかといいますと、デッサンをやりたい人はデッサン、昨年の油絵の続きをやりたい人は油絵です。今年の場合、1人1作の義務を課せられ、それを6月に「熱田展」と称して廊下に展示しました。これを定期的に行うというのが今年の新しいプランなのですが「熱田展」より他にもっとしやれた名前はないでしょうか、募集しています。

夏休みまでの残りの期間で、1年生は油絵に始めてとりかかり、2年は相変わらず自由です。どんな感じで油絵と出会うか、このタイミングが大切であり、変に遠慮したものよりも、自由な作風を見せてもらいたいところです。もう、こうなってくると個性を重んじますので、

2年生もただよい出会いをしてほしい、と祈るのみです。

夏休みに入り、8月には合宿があります。熱高では合宿のある部は少ないので大変うらやましがられます。風景の良い土地でみんなそろって油絵にいそしむことで部員の統一と調和が一層たもたれます。また、ここで描かれた絵は文化祭での展示作品ともなります。

9月の文化祭で、美術部は最高の盛り上がりになります。夏休みごろからつくっておいた紙粘土のブローチ、ガラス細工、七宝焼きの品々を売ったり、作品を展示したりします。七宝については、一般の人達もつくれるようなコーナーを設け、美術部の活動をもりだくさんにアピールします。

以上ざっと活動を紹介いたしました。この他に、作品が仕上がるごとに合評会をしたり、スケッチ遠足、区民展の作品制作などもあります。新入生歓迎コンパ、打上げコンパ、卒業式前には追い出しコンパなど、楽しい催しも行なわれます。日ごとにお互いの意気もあい、分けへだてなく活動しています。これからもそれぞれの努力目標をもって進歩してゆけることでしょう。



バレー部報告

私たち男女バレー部は今、先輩方が築いてくださった伝統を守り、同時に新しい伝統を築いていこうと努力しています。

昭和55年度、5月の頃は、1年生の入部もあってまだしっかりとはまとまっていなかった。しかし月日がたつにつれてだんだんとまとまっていきました。その目標に向って厳しい練習を行っていきました。その目標とは、8月の中旬に行われることになった第1回の市内県立大会。私立の強豪チームのいないこの大会にどうしても勝ちたいと願い……。結果は、男子が3位、女子が2位でした。優勝こそは逃がしましたが、この大会をきっかけに1人1人が自信を持ってプレーすることができるようになり、それ以後の各大会により成績を収める要因となりました。冬に行われた新人戦、そして春の高校バレー、共に名南支部予選で2位あるいは3位の成績で通過し、県大会で力一杯戦ってきました。

今年度にはいい、先輩方が引退され新チームを結成しましたが、先輩方が抜けられた穴は大きく、すぐには埋

めることができませんでした。そのため国体少年名南支部予選ではシードされていたにもかかわらず男子はベスト8で、女子は2回戦で負けてしまいました。新体育館ができ、毎日屋内で練習できるようになった途端、男子も女子も負けてしまって……。今まで先輩方は悪条件にもかかわらずよい成績を取ってこられた。なのに設備が整っている私たちは……。試合に負けた悔しさと勝てなかった自分たちの力に対する恥しさが同時にこみあげてきました。何とかして次の試合には勝ちたいと思っているうちにはいりました。去年のとうりでいくと8月の県立大会を目指して練習をするのですが、今年はずっと違いました新しい大会、1年生大会が行われることになったのでそこに目標をおきました。1年生でチームを作るということは非常に難しいことです。でも1年生は自分たちだけのチーム、先輩をたよることができないということでもはりきっていました。みんなでハチマキを揃えたり、応援のかけ声を考えたり、1年生が2年生をもひっぱっているような感じさえありました。特に男子は勝てるみこみがついてくると一段とはりきって練習するようになりました。そしてその成果が出て男子は決勝まで進み、大同高に敗れ2位という成績を残しました。もちろん県大会の出場権はあります。女子の方は、1回戦でよくまとまった大型チームの昭和高校にもう少しのところで負けてしまいました。この大会を終えて、女子の方は次の県立大会を目指して再スタートをきりましたが、男子の方は17、18日の1年生県大会、19、20日の県立大会と4日連続の公式戦のため練習が思うようにいきませんでした。県大会は準々決勝で安城東高に敗れる。

さて去年の屈辱をはらすためにも県立大会には絶対に勝つんだ、男女揃って優勝するんだといつも以上にみんな燃えていました。1日目は共に勝ち進み、2日目同じ会場で両方とも2試合目、男子は千種高、女子は愛知商と。さすがに相手も強くどちらもフルセットに。男子は粘って勝ちましたが、女子は力つき負けてしまいました。男子の決勝は東山工業と。2-0のストレートで負けましたが、内容はとても充実した満足できるものでした。

またもや優勝を逃がしてしまった熱高バレー部。しかし、私たちはこの大会によってまた何か新しいものをつかんだように思います。そしてそれを生かして、9月に行われる高校選手権を目指し、また毎日の練習に励みます。これからも、私たち熱高バレー部を応援してください。

進学状況報告

昭和56年度大学合格状況

全国大会にむけて

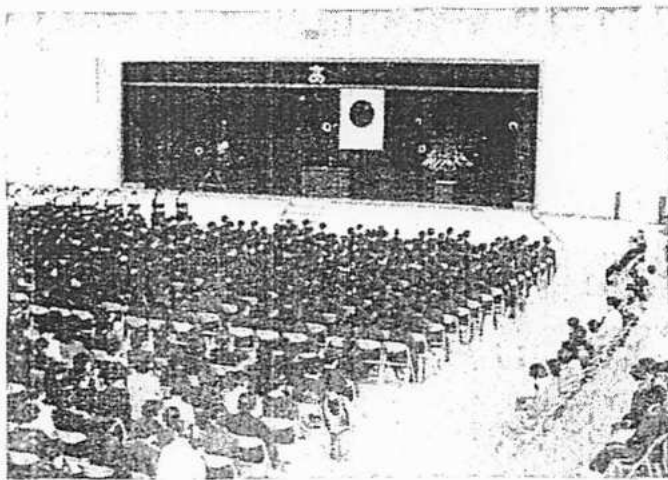
定時制 31A 馬場 宣広

大学名	現役	OB	計	大学名	現役	OB	計
新潟大	0	2	2	東海大	1	4	5
名大	2	11	13	芝工大	5	0	5
三重大	3	4	7	東京理大	1	4	5
山梨大	0	2	2	名城大	69	31	100
滋賀大	1	1	2	愛知大	37	24	61
富山大	1	1	2	愛学院大	36	3	39
信州大	4	2	6	南山大	14	11	25
静岡大	2	5	7	愛工大	34	4	38
名工大	2	5	7	日福大	13	8	21
愛教大	7	9	16	中部工大	18	3	21
岐阜大	7	4	11	金城大	14	0	14
都留文大	0	8	8	淑徳大	13	0	13
名市大	0	3	3	椙山大	9	0	9
県立大	4	1	5	同志社大	0	8	8
慶大	2	3	5	関西大	1	12	13
上智大	0	3	3	立命館大	4	22	26
中央大	0	2	2	名市短	3	0	3
日本大	9	3	12	市保短	5	0	5
法政大	2	7	9	淑徳短	12	0	12
明治大	5	4	9	金城短	9	0	9
早大	0	2	2	南山短	3	0	3
青学大	0	2	2				

わが柔道部は、今年、復活したクラブです。自慢するようなことは一つありませんが、かつて先輩たちが全国大会に出場した記録があります。こんな柔道部に1年生を迎え、「さあやるぞ」といった気持で始めました。練習にも少し慣れてきたとき、顧問の先生から6月21日、県のスポーツ会館で、大会があるといわれました。そこで僕たちは「先輩に続いて全国大会に出るぞ」という気持で練習を始めました。しかし少したつと練習をする部員も少なくなり、最初は、個人戦・団体戦ともに出場するつもりだったのですが、結局は個人戦だけの出場ということになりました。大会前日の夜はなかなかおちつかなくて眠れません。学校では、友だちに「大会に出るのならいい成績をもってこいよ」といわれ、僕にはどれも無理なことだと思いました。いよいよ大会の日がやってきました。朝早くから県スポーツ会館へむかいました。バスの中で僕は大会に出るのはこわい、大会をほうり出して逃げたいという気持でいっぱいでした。県スポーツ会館に着いてあたりを見まわすと柔道着をもつた、大きなからだの人がたくさんいました。僕にはいっそうこわいという気持がつのってきました。

試合場に入るといままではこわいと思っていたのが、今度は負けてたまるかと思うようになったのですから、おれながら不思議です。

第1試合はやはり僕より体の大きな人とあたりました。最初に僕の名前が呼ばれ、次に相手の名前が呼ばれました。審判の「始め」という声を聞いたとたん「勝つぞ」と心に決めて組みました。3分間すぎ、引わけで、3分間の延長。ここで僕は今まで先輩におしえてもらった技をすべてぶつけようと思いました。第1試合は寝わざで1本をとり、続く第2試合、第3試合ともに寝わざでなんとか勝ち進みました。しかし第4試合でとうとう負けてしまいました。この時です、僕はあの柔よく剛を制すという柔道の本当の精神を僕の体で知りました。それというのも第4試合の相手が僕より少し小さかったのです。これは勝ると相手をみくびっていたのです。第4試合が終わった時点で僕はベスト8に入っていました。その後敗者復活戦で2回試合をしました。僕は6位で、同僚の梶山君も7位でした。それで僕たち2名は全国大会出場が決定しました。二度とないようなチャンスをつかんだ僕は、8月23日に全国大会にむけてがんばりたいと思います。またこれをきっかけに柔道部を大きくしたいと思います。



昭和56年度入学式風景(新体育館)



同窓会役員名簿

- | | |
|-------------|-------------|
| 会 長 佐々木元彦 ① | 会 計 江村 雅文 ④ |
| 副会長 田中 敬二 ② | 〃 佐藤 鶴代 ④ |
| 〃 岩淵 正憲 ③ | 〃 小池 隆志(定1) |
| 〃 豊田 和弘 ④ | 監 査 下出 義朗 ① |
| 〃 竹内 正己(定1) | 〃 今枝 淑子 ① |
| 書 記 小林 勝次 ⑦ | |
| 〃 長谷川雅俊 ⑬ | |
| 〃 大沢 利尋(定6) | |



盛況の25周年記念パーティ

愛知県立熱田高等学校同窓会会計報告

(昭和55年4月1日～昭和56年3月31日)

収入の部	
前年度繰越金	1,615,185
全日第25回生定時第12回生入会金	990,000
預貯金利息(通常・定期)	133,719
総会参加者参加費	2,600,000
会員名簿売上及広告収益	6,048,500
合 計	<u>11,387,404</u>
支出の部	
①同窓会報2号関係費	1,134,270
②創立25周年記念式典関係費	
名古屋国際ホテル諸経費	3,473,005
永年勤続者表彰式関係費	416,700
母校寄贈記念品・参加者記念品	440,000
同期会案内・その他諸経費	229,794
③会員名簿関係費	
会員名簿印刷費	3,666,250
諸調査費・校正費等	217,760
発送経費	640,700
④その他	
寄贈卒業生名簿作成費	25,000
母校教職員転退職別	174,000
全国大会激励会(柔道部1名)	10,000
慶弔費	46,260
事務費・諸会議費	197,610
合 計	<u>10,696,349</u>
次年度繰越金	716,055

上記の様にご報告申し上げます。
 同窓会会計 江村雅夫④ 佐藤鶴代④
 小池隆志定1
 上記を会計監査の結果相違ない事を認めます。
 同窓会監査 下出義朗① 今枝淑子①

創立30周年を記念して
創立30周年記念会誌を
作成準備中です。

あなたが楽しんだ、苦勞した。そして
 生きた高校生活の写真をお貸し下さい

例えば…自分の時代がよく表われて

いるもの、自分たちの記念
 になるもの。

修学旅行・文化祭・体育祭
 遠 足・予餞会・入学式
 卒業式・その他

※ お借りした写真は必ず返却します。

締 切……昭和56年2月28日

提出先……熱田高校同窓会係

題 字 名 郷 榮 助 先 生

熱田高等学校同窓会報

発行日 昭和56年12月20日
 発行所 〒456 名古屋市熱田区千年1の17の71
 愛知県立熱田高等学校同窓会
 編集兼 会 報 編 成 委 員 会
 発行者 明 治 紙 業
 印刷所